

埼玉県における 中山間地域ふるさと支援事業



皆野町立沢から武甲山を望む

農地活用推進課

中山間地域ふるさと支援事業とは

- 中山間ふるさと・水と土保全対策事業実施要綱（農林水産省）に基づき、都道府県に基金を設置。（埼玉県は6億9千万円）
- 中山間地域が有する多面的機能の発揮と、地域住民活動の活性化を目的とする。
- 事業主体は都道府県。
- 事業費は約12,000千円／年。

埼玉県における実施内容 (H17～H21)

調査研究事業

- 地域住民活動活性化のため地域資源調査やワークショップ等の実施
- 中山間地域に適した作物の導入や鳥獣害対策の調査研究
- 中山間地域の魅力を広く伝えるため地域資源を調査

研修事業

- 地域活性化に必要な人材を育成するための研修の実施
- 研修受講者をふるさと指導員として位置付け

推進事業

- 都市住民の中山間地域への理解を促進するため「地域環境学習会」の実施
- 地域活性化のイベント等と協調して、中山間地域の有する多面的機能の啓発、普及活動を実施

調査研究事業のうち

地域住民活動支援



東秩父村上ノ貝戸 (H17～18)

- 遊休農地に花桃を植栽し、農業所得の向上と地域の景観向上を図り、イベント「花桃まつり」開催につなげた。(委託先: (株)ポリテックADD)



秩父市吉田石間 (H18～19)

- 廃校となった石間小学校を利用した「石間交流学習館」を核として、うどん打ち体験やイベント「天空だんべえ石間」の開催に至った。(委託先: (株)インテージ)



ときがわ町大櫛地区 (H19～20)

- 廃校を活用した交流施設「くぬぎむら体験交流館」のオープンに先立ち、山村体験メニューやレストラン運営などについてワークショップを実施した。(委託先: (株)農協観光)



秩父市大滝中津川 (H20～21)

- 地域住民による地域資源の洗い出しとワークショップを重ね、イベント「中津に來いな～展」を立ち上げた。(委託先: (株)ポリテックADD)

調査研究事業のうち

集落営農体制確立



野生動物被害の総合的な防除技術の開発

- ニホンザルの被害防止技術の開発
- 新たな被害防止柵の開発
- イノシシの捕獲技術の開発



色付きジャガイモ(ノーザンルビー、シャドークイーン)生産と加工品開発

- 栽培技術体系の確立
- ジャガイモ中のアントシアニン分析
- 加工適性試験



秩父特産物であるカエデの葉を利用した飲料(ラムネ)の開発

- 葉の成分分析(ポリフェノール)
- 飲料製品の開発
- アンケート調査

調査研究事業のうち 地域資源調査



広域農業マップ

- 複数の市町村を広域に網羅したマップとして利用者の利便性に配慮
- 観光農業の案内に加え、様々な地域資源を掲載



土地改良施設等の調査

- 地域に存在するため池や用水路などを調査し、その役割を広く紹介



学校での利用を考慮

- 小中学校の教材として活用できる地域資源マップの作成

研修事業



山形県アンテナショップ視察研修

- 山形県のアンテナショップ、銀座「おいしい山形プラザ」において、山形の食材を活用したレストラン「ヤマガタサンダンドロ」や特産物の販売について視察し、地域ブランドの創出について研修した。



鴨川市交流施設視察研修

- 鴨川市の「みんなみの里」において、直売事業、体験事業、加工事業、レストラン事業について研修した。地の物をふんだんに取り入れた郷土料理「里山セット」は農林水産大臣賞を受賞。



旅行会社による講演会

- (株)JTBから講師を招へいし、地域の宝を活かした観光の在り方について、全国の優良事例、失敗事例を交えて紹介してもらった。

推進事業

都市住民を対象とした地域環境学習会



- 毎年約100名を対象に農山村への理解促進を図るバスツアー
- 内容はこんにゃくづくり体験やみかん狩り体験、文化遺産見学など

企画・実施 秩父農林振興センター

住民活動支援を補完するための消耗品等



- 地域イベントののぼり旗、ハッピ等
- 観光パンフレットの印刷等、雑誌「新・田舎人」の購入配布

事業実績

事業区分	主な成果指標	数値目標	成果	備考
調査研究 事業	地域住民活動の 活性化による地 域の振興	住民活動支援 10地区	6地区	<ul style="list-style-type: none"> ・東秩父村上ノ貝戸 ・秩父市吉田石間 ・ときがわ町大櫛 ・秩父市中津川 ・皆野町立沢 ・横瀬町芦ヶ久保
		調査研究20課題	20課題	4課題/年×5カ年 ※農林総合研究センター において実施
		地域資源等調査 14地区	9地区	<ul style="list-style-type: none"> ・秩父市・皆野町 ・神川町・本庄市 ・寄居町・小川町 ・東秩父村・ときがわ町 ・越生町
研修事業	地域リーダーの 育成	ふるさと指導員14人	14人	
推進事業	中山間地域の多 面的機能の周知	中山間地域の多面 的機能を理解してい る県民の割合70%以 上	50%	※食と農林業ハーモニー フェスタ(川越市)の来場 者にアンケート調査を実 施

中山間地域ふるさと事業実施計画(H22～H26)

1. 事業実施の基本方針

現状と課題	<p>本県の中山間地域は県土面積の約1/3、林野面積の85%を占めており、水源のかん養や大気の浄化、自然環境の保全など県民生活にとって欠くことのできない多面的機能を有している。これら多面的機能は、中山間地域に暮らす人々のたゆまない努力によって維持されている。しかし、中山間地域の多くは生活環境や産業基盤が平野部と比べて極めて不利な状況にあるため、人口の減少や高齢化が進行しており、農林業をはじめ集落機能の維持に支障を来している。</p>
事業実施の基本方針	<p>中山間地域の有する多面的機能の恩恵は県民が広く享受するものであることから、県の5カ年計画である「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」や農林部が策定する「埼玉県民の健康と暮らしを支える食料・農業・農山村ビジョン」との整合性を図りながら、多面的機能の保全に資する地域活動の支援、人材の育成、都市・農村の交流などの取組を行うこととする。</p>
計画後の目指す姿	<ul style="list-style-type: none">・中山間地域のコミュニティーが機能し人々が明るく元気にいきいきと暮らしている・地域に適応した農林業を導入することにより農地や山林が適正に保全されている・集落機能を維持・活性化するための知識や経験を有するリーダーが育っている・都市・農村交流を通じて県民が中山間地域の有する多面的機能を理解している

中山間地域ふるさと事業実施計画(H22～H26)

2. 事業実施の成果目標

事業区分	主な成果目標	数値目標	内容
調査研究事業	住民活動による地域の活性化	・住民活動支援18地区 ・調査実証10課題	地域の抱える諸問題を解決するため大学生等若者の力を借りるなどし、農林業や集落機能を維持・活性化するための取組を行う。 特産品開発や鳥獣害対策等、中山間地域の特性に応じた農林業を確立するための調査、実証を実施する。
研修事業	集落の活性化に資するリーダーの育成	・集落リーダー10人	住民活動支援地区等におけるリーダーを育成するための研修を実施する。
推進事業	中山間地域の多面的機能の啓発・普及	・地域環境学習会等に 参加する都市住民500人	都市住民の中山間地域への理解促進を図るため環境学習会を実施するとともに、中山間地域の多面的機能を広く県民に紹介するための啓発・普及活動を行う。

中山間地域ふるさと事業実施計画(H22～H26)

3. 事業計画

事業区分	事業名	事業内容	過年度		計 画 期 間 に お ける 事 業 量	年度別事業量				
			～H16	H17～21		H22	H23	H24	H25	H26
調査研究事業	住民活動支援・ふるさと支援隊	住民活動を活性化するためのワークショップを実施する。大学生等若者の力を活用して集落活性化の方策を調査する。	4	6	新規 18地区	10地区	2地区	2地区	2地区	2地区
	集落営農体制確立	地域の特性を活かした農林業の確立について調査・実証を行う。	10	20	10課題	2課題	2課題	2課題	2課題	2課題
研修事業	集落リーダー育成研修	地域活性化に必要なリーダーを育成するための研修を行う。	0	14	新規10 人	2人	2人	2人	2人	2人
推進事業	地域環境学習会	都市住民の中山間地域への理解を促進するための取組を行う。	0	10	10回	2回	2回	2回	2回	2回
	啓発・普及活動	中山間地域の多面的機能を紹介するため情報誌を購入配布する。	40	20	20回	4回	4回	4回	4回	4回
		地域活性化のためのイベントと協調し啓発・普及活動を行う。	—	1	5地区	1地区	1地区	1地区	1地区	1地区
参考事業費 (単位:千円)			32,595	43,489	60,000	12,000	12,000	12,000	12,000	12,000

調査研究事業のうち

ふるさと支援隊（新規）

現状

- 高齢化する中山間集落（高齢化率23.1%・全県18.8%）
- 人口減少の進行（H11→21で95%・全県104%）

問題

- 過疎化、高齢化により地域コミュニティの維持が困難
- 伝統文化の継承、耕作放棄地・放置林の増加等が懸念

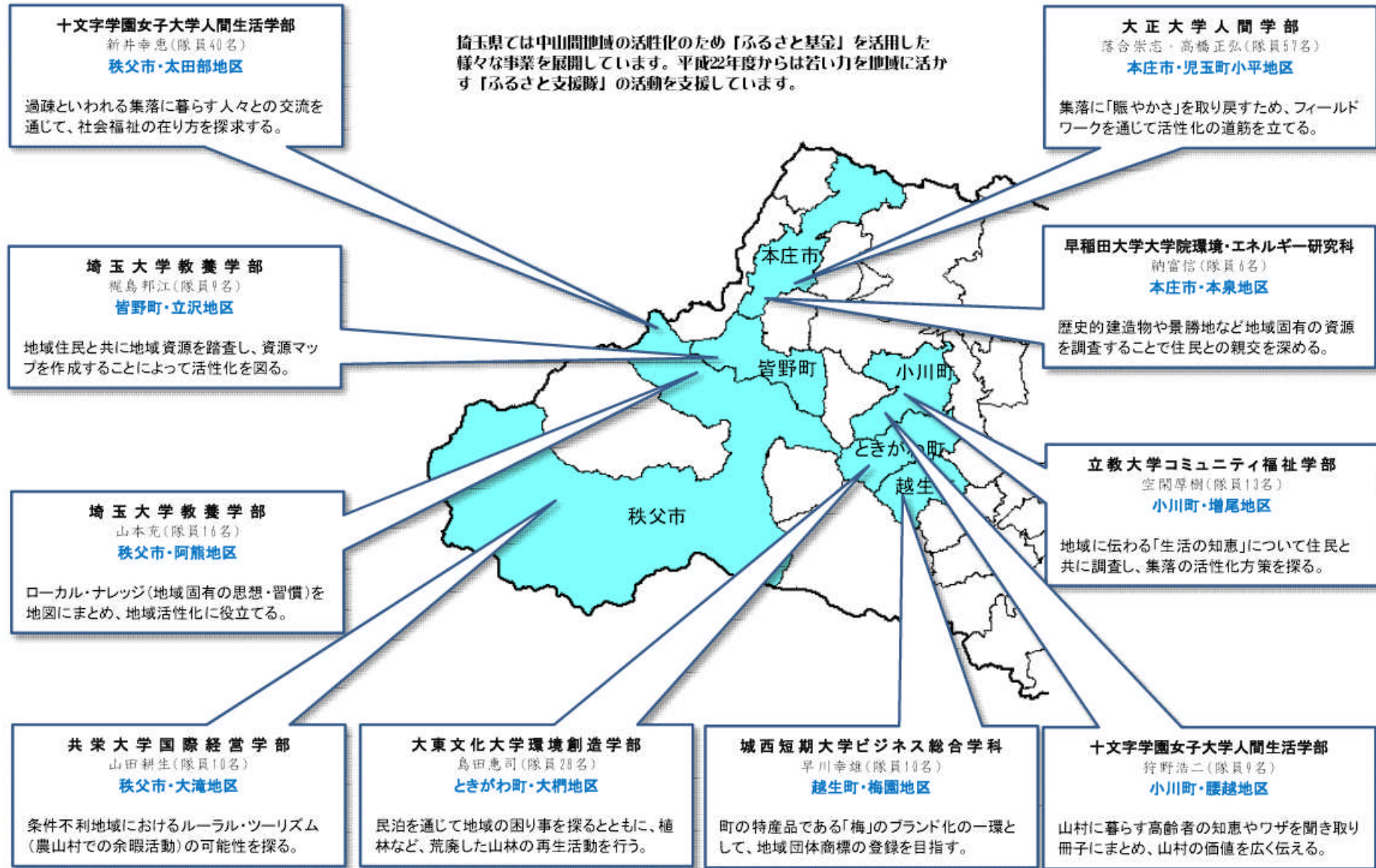
ニーズ

- 若者と話をするだけで元気が出る（高齢者の声）
- 学習の場として中山間地域を利用したい（大学の声）

マッチング

大学生の持つ新しい視点や行動力、専門技術・知識など「外からの力」を活用することによって集落の活性化を図ることを目的とした「ふるさと支援隊」を募集
→8大学10チームから応募（すべて採択）
集落の活性化を目的としていることから、活動分野は農林業に限定せず、環境、観光、福祉、伝統文化など幅広く設定

平成22年度「ふるさと支援隊」活動地区一覧



(事例1) 十文字学園女子大学

50年ぶり「花輪踊り」

「花輪踊り」笑顔広がる



「花輪踊り」を披露する十文字学園女子大学の学生―秩父市吉田太田部の太田部コミュニティセンター

秩父市吉田太田部地区で、かつて踊られていた「花輪踊り」が半世紀ぶりに復活。しーあり、過疎・高齢化が進む。八日、地元の十八神社の祭り。一つの集落に26世帯42人が暮らす。

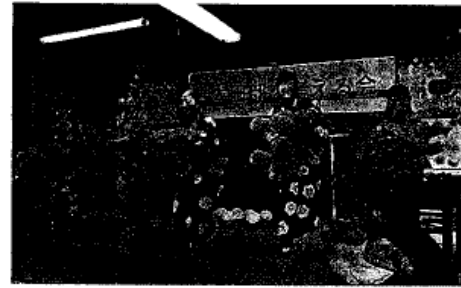
秩父太田部 半世紀ぶり復活

住民と学生らが再現

す。花輪踊りは八木節に合わせた踊りで、地域の祭りの余興などで踊られていた。地域によって踊り方が違い、太田部では源太踊り」とも呼ばれていた。戦後は各地で踊られていたが、1965年ごろから次第に踊りれなくなってきた。

今年7月、県の「ふるさと支援隊」の一つである新座市の十文字学園女子大学の新井幸恵ゼミの学生が、「踊りの復活が地域を元気にするのではないかと考え、集落の人の記憶を頼りに、試行錯誤の末、踊りを復活させた。」の1日、学生たちは、住民や太田部を考える会の会員ら約60人の前で花輪踊りを披露した。

手ほどきをした黒沢美津江さん(80)は「私が踊ったのは60年前。皆さん上手で書を思い出した」と喜んでた。同ゼミの杉浦光さん(21)は「まだ未完成ですが、少しでも昔の踊りになるように頑張ってきました。失敗もありましたが、集落の人に喜んでいただきた良かった」と笑みを浮かべた。(磯田正重)



花輪踊りを披露した十文字学園女子大の学生たち

秩父市太田部地区に伝わる郷土芸能「花輪踊り」が、十文字学園女子大学(新座市)の学生たちの手で半世紀ぶりに復活上演された。太田部地区は群馬県境に近い山間部の高齢集落。過疎地域の福祉支援などを研究する大学教員が、埋もれていた踊りの存在を知り、教える子学生たちに勧めてよみがえらせた。

この踊りは、女性たちが竹で作った輪に紙製の花を付けた花輪を手に持ち、民謡の八木節に合わせて踊る。いつ頃から踊られていたのかは定かでない。住民の記憶では50年ほど前に地元の神社の祭りで披露されたのが最後だったという。

太田部地区は、戦後の高度経済成長期に過疎化が進み、若い踊り手が少なくなったのが途絶える原因になったとみられる。人口は現在45人で、その7割を65歳以上の高齢者が占める。

この地区には、3年前から新井幸恵・十文字学園女子大准教授が研究で訪れるようになり、新井准教授は「昔、花輪踊りという踊りがあった」と聞いた。しかしこのように踊ったのが、住民たちの記憶はすっかり薄れていた。

そこで、新井准教授は群馬県内に花輪を手にした踊りがあることを調べ、その踊りを基に、黒沢美津江さん(80)に思い出ししてもらった。

学生による復活上演には、新井准教授のゼミ生らも参加。この企画は、地元のパラチーティア団体「太田部を考える会」(新井辰信会長)が全面協力し、今年度からスタートした県の「ふるさと支援隊」事業にも認定された。女子学生たちは、7月から黒沢さんの指導で振り付けを覚えた。上演会は1日、太田部コミュニティセンター(吉田太田部)で行われ、着物姿の学生6人が、ピンクやクリーム色の花輪を巧みに操り、寄せ集めて模様を描いたりして、住民から盛んな拍手が送られた。

学生たちは「みんなが喜んでくれたので踊りやすかった」と話し、指導に

つた」と話し、指導に助けてくれた黒沢さんは「昔は踊りが何よりの楽しみだった」と、目をうつすらを浮かべていた。

住民たちは今後も、学生たちが継承して踊ることを願っている。



太田部だより



昭和35年頃 花輪踊り/きれいに盛装して記念撮影
写真提供：新井辰信さん



花輪踊り練習 撮影：十文字学園女子大学 新井幸恵准教授



十文字学園女子大学の学生さんが
50年ぶりに花輪踊りを復活

50年ぶりの花輪おどり



(事例2)大東文化大学

「源流の森を」学生ら汗

大東大生とNPO ときがわの放置林整備



ときがわ町西部の都幾川源流域の山奥で、NPO法人と大東文化大生が約二畝の放置林を整備して「源流の森」を創出している。今月初めには大東大生とNPOの約五十人が標高約七百メートルの山に入り、生い茂る雑草や雑木の刈り払いに汗を流した。付近一帯の山はスギ、ヒノキが植林された針葉樹林。NPOと大東大生らは放置林を整地した後、広葉樹などを植林し「動物のすめる豊かな森にしよう」と意気込んでいる。(中田謙之)

放置林に自然な雑草を除去し、花火・鳥の鳴き声など「ときがわ町」(NPO)の活動の様子。

活動しているのは、ときがわ町で快活な無農家の若者、NPOのメンバーなどに取り組みNPO法人とときがわ山草文化研究所、柴崎先生理事長(中心)、大東文化大環境創造学部の島田准教授などが指導する島田ゼミの学生たち。

島田ゼミは、「地域の資源を探索」をテーマに活動しており、昨年はときがわ町の人たちが誇る集内宿の古刹・慈光寺境内で、竹刈りのボランティアに参加した。

昨年秋、放置林の地権者から「きれいな森にして有効に使ってほしい」との願いがNPOにあり、ときがわ町の活動を継続したいと考えていた島田ゼミの学生たちが、この機会に取組むことになった。

経費がなかった開口、第一歩となる整備作業に参加したのは島田ゼミの二二年生二十七人とNPOの二

厳しい山仕事、民泊交流 成長実感

島田准教授は「山村の都会、農林業や労働三次産業」という考えを基に、置業を学生たちで取り扱ってほしい。現場の作業は熱く心配したが、隣家の菜園らしいと云って、学生には好評だったと云う。

活動前、半分以上の学生が民泊に抵抗を覚えたが、「一晩だけだ」「お年寄り夫婦の家で泊まり、親がどういふ気持ちで子どもを育てたかよく分かった」なども感想を言いつ、「学生たちは目に見えて成長した」と島田准教授を感服させた。今後の活動を継続していかたい。

島田准教授は「山奥の十八、魚釣りや焚き火で午前十時から午後一時半まで重労働に汗を流し、〇・一時間の休憩が終わった。学生たちはその後、地域の十四軒の民家に宿泊。地元の人たちと交流した。

NPOの柴崎理事長は「山の仕事は今まで専門家のものだったが、NPOと学生との協働で、すそ野を広げていく意義は大きい。将来的には専門家の意見も聞きながら広葉樹などを植え、源流の水を引いて森の拠点にしたい」と願う。

ときがわ町大野の都幾川源流域の放置林で今月から、大東大と都会入りの森づくりが始まった。今後は、五月に一度のペースで作業を進め、動物がすくく保水力が豊かになる樹林が茂る森の整備を目指す。

森づくりの目的は、同地区を拠点に都市と山村の交流で山間地域を元気にする活動としてNPO法人とときがわ山草文化研究所(柴崎先生理事長)と東松山市にある大東文化大環境創造学部の島田准教授のゼミの学生たち。

同研究所は山の所有者が活動に使ってほしいと申し入れた。今、今回の森づくりが始まった。

島田ゼミの学生たちは昨年夏、同地区を訪れ、草平天文会や合宿や地域の調査を行いました。今回、森づくりの目的を話し合

学生と都市住民 森づくりときがわ

森づくりを島田准教授に話した。学生は、島田准教授の「森づくり」を聞いて、森づくりの目的を話し合

放置林は標高700メートル以上。面積は約一畝。初日は学生27人と同研究所メンバー約20人が、自分の雑木を倒し、雑草を刈るなどの作業を行った。沢の水を引いたの道は、森づくりの第一歩。

その後、学生らは、同地区と桐平地区の民家に一泊。地元の人たちと会話も弾み、泊めて頂いたお家に野菜の収穫などの手伝いをしてもらった。両地区も学生と、集団民泊を今月初めに引き続けた。

柴崎理事長は「学生は、同地区を歩いて、新しい森づくりのスタートだった。民泊も高齢化が進む地域を元気にしていくための『森づくり』を推進する



森づくりに向けて作業(中田謙之)の撮影(島田准教授)提供

H22.7.12 FM NACK5



H22.9.4 NHK



H22.9.4 源流の森づくり



H22.12.4 源流の森づくり

